

災害研究の最前線に立つ 若手研究者の仕事観

学生企画「学生が知りたい! 土木人の心意気」(全5回)の最終回は、東北大学災害科学国際研究所の助教である、佐藤翔輔氏に話を伺った。今特に注目されている災害研究に取り組む若手研究者の、心意気を紹介する。

[取材協力者] 佐藤 翔輔氏
正会員 東北大学 災害科学国際研究所 助教

SATO Shosuke

1982年生まれ。長岡高専環境都市工学科、同専攻科を修了後、京都大学大学院情報学研究所に進学、博士(情報学)を取得。2011年4月に東北大学大学院工学研究科附属災害制御研究センター助教に着任。2012年4月、改組により現職に至る。



——災害の研究機関に就職された経緯を教えてください。

佐藤——中学校を卒業する時、将来は何か人の役に立つ仕事がしたいと思って長岡高専(高等専門学校)の木系の学科に入りました。5年間の課程を終えて専攻科に進学したのですが、専攻科2年生(大学でいうと4年生)の時に7・13水害でアルバイトをしていた塾が流出被害にあいました。しかも、その3か月後に新潟県中越地震が発生して、当時住んでいたアパートが被害にあって2か月ほど住めなくなりました。その時、「災害はヒトゴトではなく、もっと身近な現象なのだ」と思い、災害の被害にあった人のサポートの仕方や災害

後の社会的な現象に興味を持ち始めました。

専攻科修了後は、社会科学系の先生のもとで災害のことをさらに学びたいと思って、京大の情報学研究科を受験し、博士課程まで進みました。就職の時、公務員という選択肢を考えたこともありましたが、研究機関の方が常に災害のたびに災害の最前線に関われるし、地域に縛られることなく普遍的に社会の役に立つことを考えられるのではないかと思い、研究機関を選びました。

——災害に関係する仕事をする上で、気を付けていることはありますか。

佐藤——災害に関する仕事におい

て、大学や研究機関の役割には、いわゆる「研究」のほかに、「後方支援」と「広報」があると思います。「後方

市民との取組みがうまくいくように、産官連携を支援するとともに、市民ともコミュニケーションをとることで、意思疎通がスムーズになるようにサポートすることです。実際、行政や市民の中に混ざって一緒に考えながら、災害対応の仕事を改善できるように研究しています。この時、現場にいる被災自治体の方や被災者の方に対してわれわれ専門家は、知っていることが多いからと言って「教えて」はだめで、実体験者である被災者の方に「教えてもらう」というスタイル

をとっています。現場の方との双方向のコミュニケーションがなければ、研究は進まなくなります。

また、「広報」とは、被災地の取組みを広く情報発信することです。(自身は例外ですが)多くの人は、人生に二度以上、災害にあうことはありません。そういった意味で、過去の経験に学ぶことは重要であり、その経験を広く「広報」するのもわれわれの役割だと思っています。

——普段の生活で心がけていることはありますか。

佐藤——いわゆる「ほう・れん・そう」ですね。上司はもちろんのこと、研究と直接的に関わっていただく住民の方や役所の職員の方などへの報告、



写真1 セケ浜町復興支援ボランティアセンターの記録誌作成ワークショップの風景 (写真左上が佐藤氏)

連絡、相談をこまめにする事です。特に、電話やメールをすぐに返すことはとても意識しています。短いサイクルをまわすことが大事だと思っています。実はこれは、災害対応の基本で、たとえば、PDCA (Plan-Do-Check-Act)などがその概念にあたります。状況を把握して、計画を立てて、実行する。実行すると状況が変わるので、また新たに計画を立てるといふことの繰り返しですね。災害時のような極限の状況で使えるモデルは、日常にも使えるはずだと考えています。災害時の理想のセオ

リーを実生活で試しているわけですね。

私生活では、家族と過ごす時間を大切にしています。早い日で17時半には帰ります。仕事で高いパフォーマンスを発揮するための体調管理はもちろんですが、家族のこととも含めて自己管理ができれば、防災の研究はできないのではと考えています。有名な先生が、「防災の男性研究者は、『忘妻』^{ぼうさい}してはならない」とよくおっしゃいます(笑)。

—— 学生時代に思い描いていた将来像と比べて、意外だったことはありますか。

佐藤—— 研究職という仕事に関してはありません。高専では先生方の多くが博士号をもった研究者なので、いわば高校生の頃から研究者を間近で見えてきたため、研究者という職業は早い段階でイメージできました。学生時代と研究の内容は違いますが、モノのとらえ方、フレームワークと問題を処理す

るツールは、変わらないです。

教育者としての仕事は、大学院生の時に後輩の面倒をみていた経験があったので、特に抵抗はありませんでした。その時担当した後輩は、自分より年上だったり、キレキレの優秀な後輩だったり、留學生だったりしたため、多少のことでは動揺しなくなつたというのもあると思います。

—— 最後に、読者の学生に向けてメッセージをお願いします。

佐藤—— 大切なのは、なんとなくでもいいから、自分にとっていいと思える方向へ行動してみることだと思います。私の場合、大学院生の時に、それまでと研究内容がまったく変わった時は、ただただ大変でしたが、今となつてはそれによって「武器」が増えたのだと思います。若い時に「武器」を増やしておく、将来の選択肢が広がります。

あと、災害のように実用性が求められる研究もありますが、一方で、基礎研究とか理論ベースの研究をされている学生さんともいます。私も大学院生の時は、本当に社会の



写真2 宮城県岩沼市における津波防災シンポジウムでの基調講演の様子。http://www.pref.miyagi.jp/site/0311densyogensaip/dobokubu-tsunami-h260517.html

役に立つのだろうかと思っていました。でも今思うと、理論の方が普遍性を目指している分、影響範囲が広いと思うんですね。今やっていることと、それとは別の方もいいたいと思うことと、両方を大事にしてください。学生の時は所属研究室や指導教員などの制約の下で研究をやっていると思いますが、就職する時は自分にとっていいと思える研究を始めることもできます。その時に、実用性と理論の両方できるようになっているといいと思います。

(注1) 7・13水害…2004年7月12日から13日にかけて、新潟県中越地方や福井県を襲った記録的な大雨。

(担当編集委員…久松明史、大平悠季)